

事例7

< 事例概要 >

- ① 70歳代、女性、身長150 cm台、重度の僧帽弁狭窄症、心不全、心房細動がある患者。抗血栓薬を服用中。
- ② 術前精査のため、肺動脈カテーテル検査を実施（使用したカテーテルのバルーン適正容量1.5 ml）。
- ③ X線透視下で、右大腿静脈より肺動脈カテーテルを挿入。カテーテルを肺動脈に誘導できずガイドワイヤーを先行させて前進。バルーンを1 mlずつ2 mlまで膨張させたが肺動脈楔入圧が測定できなかった。
- ④ 右心内圧測定後、咳嗽、喀血あり、直後に鼠径動脈触知不可となり、胸骨圧迫を開始。気管挿管、PCPS（経皮的心肺補助装置）を装着した。超音波検査で胸腔内に体液貯留を認め、肺動脈造影を試みたが出血部位の特定に至らず、検査開始約8 時間後に死亡。
- ⑤ 死因は、左肺動脈損傷（疑い）による出血性ショック。死亡時画像診断（Ai）有、解剖有。